

## 母親が児の泣き方を判別する能力獲得に關与する要因の検討

堀井満恵<sup>1)</sup>, 笹野京子<sup>1)</sup>, 筏井沙織<sup>2)</sup>,  
石井仁乃<sup>3)</sup>, 長谷川ともみ<sup>1)</sup>

1) 富山医科薬科大学医学部看護学科

2) 日本赤十字社医療センター

3) 金沢大学医学部附属病院

### 要 旨

本研究は母親がパニックに陥ることなく、児の泣き方や泣き声からそのニーズや訴えの意味を把握し、的確なケアができるよう、現在育児の真っ只中にある母親達に、児の空腹時、不快時、眠い時、甘えたい時の泣き方や泣き声の判別に、どのような方法や手段を用いているか、また、その断定の根拠などについてアンケート調査し、一方、育児経験は無いものの同年代であり且つ近い将来看護支援者になるであろう本学看護学生が児の泣き声にどのような判別の方法や手段が得られるのかを探るため、調査に協力が得られた4年次生に、泣き声テープを聴いてもらい聴き分け状況を調査し、比較検討を行った。

その結果、母親は児の泣き方の判別手段として「時間」が最も多く、次に「時間と声の調子」を挙げ、僅かの人だけが「しぐさ」で判断していた。また、その獲得要因としては「育児の中の気持ちの安定」「時間」「しぐさ」「声の調子」に加え、その泣きの意味を解かろうとして「おっぱいを与える」「おむつを換える」「抱っこする」「声がけをする」など、児の反応を見ながら、こまめに対応している母親は早期に判別できることがあきらかになった。

### キーワード

育児、児の泣き声、泣き方（声）判別の獲得環境、泣き方（声）判別の獲得スキル

### はじめに

近年、核家族化、少子化が進み、身近に育児中の母親モデルや助言者・相談者も得にくいことから、パニックに陥る母親が増加し、子どもの虐待に発展するケースが社会問題化してきている。泣くことでしか思いを伝えられない新生児や乳児の泣き方・泣き声に関する研究は極めて少ない。<sup>1)~9)</sup>

Waszは一般に女性の多くは児の泣き声を聞いて空腹・痛み・不快など泣き声の原因またはその状況で同定が可能だとし、またこの認知能力は育児経験のある女性、さらに今現在幼子の母親であ

る女性がより優れている<sup>1)</sup>と述べている。

また、脇田らも養育行動の積み重ねにより、正確に泣き声の意味を理解し、適切な関わりにつなげられる<sup>2)</sup>としている。

このようにして、母親が児の泣き方の意味を理解していくことは、出来るだけ早期に児のニーズを把握し、泣き方の意味を判別できると自信がもてるのみならず、より良い母子関係を形成、確立できるという点からも重要である。

そこで我々は母親が児の泣き方の意味を判別する能力をいかに獲得していくのか、その判別能力獲得手段と獲得根拠要因を明らかにし、育児援助

の一助としたいと考えた。

二乗検定を用いた。

## 研究方法

## 結果

### I. 対象

1997年9月～1999年6月までに富山市O産婦人科病院で出産した母親100名と本学看護学科4年生54名。

### II. 調査期間

1999年8月2日～9月2日

### III. 方法

1. 児の泣き方を“お腹が空いた”とき，“おむつが濡れた”とき，“眠い”とき，“抱っこして欲しい（さみしい・甘え）”ときの児の泣き声（以後「空腹」「不快」「眠い」「甘え」とする）をとり上げ、それぞれの泣き方について、どのようなきっかけでそうだとわかったのか、それは生後何日目頃か、泣き方の特徴、そのときの母親の対応とそれに対する児の反応を質問紙にて調査した。

2. また、比較するため本学看護学科4年生に、「空腹」時、「不快」時、「眠い」とき、「甘える」ときの児の泣き声を録音したテープを聴いてもらい、何を訴えた泣き方か（空腹時、不快時、眠い時、甘えるとき、うれしいとき）を当ててもらい、なぜそうだと思ったかを自由記載してもらった。

また、両者に児との接触経験の有無などについても回答してもらった。

3. 母親には、“児の泣き方を判別できた日数や母親の背景”も加味して、泣き方の同定に影響を及ぼす要因について分析した。母親の検定にはフィッシャーの方法を、学生の検定にはカイ

回収率は母親が46.0%，学生が100%で有効回答率は共に100%であった。

### I. 対象の背景

表1の通りであった。

### II. 母親がその泣き方を判別する手段

#### 1. お腹が空いたときの泣き方

複数回答可として回答してもらったにもかかわらず“授乳時間が近かったから”だけを選んだ人が35.0%（14人）であった。ほかに“おっぱいを

表1 対象の背景

	母親 (n=46)	学生 (n=54)
年齢	28.4±5.2歳	21.7±0.7歳
初産	初産婦 69.6% (32人) 経産婦 30.4% (14人)	
児の月齢	6.2±5.3ヶ月	
家族形態	核家族 52.2% (24人) 複合家族 41.3% (19人) 無回答 6.5% (3人)	核家族 68.5% (37人) 複合家族 31.5% (17人)
妊娠中の気持ち	うれしかった・待ち望んでいた 82.6% (38人) 仕方なかった 2.2% (1人) 嫌だった 4.3% (2人) 不安だった 4.3% (2人) つわりがひどかった 2.2% (1人) わからない 4.3% (2人)	
出産時の気持ち	すごくうれしい 56.5% (26人) よかった 37.0% (17人) 思っていたものとは違っていた 4.3% (2人) 無回答 2.2% (1人)	
母親・両親学級への参加状況	参加したことがある 82.6% (38人) 参加したことがない 15.2% (7人) 無回答 2.2% (1人)	
母児同室・異室	同室 10.9% (5人) ・・分娩後3～7日 異室 89.1% (41人)	
職業の有無	有 34.8% (16人) 無 63.0% (29人) 無回答 2.2% (1人)	
過去に児との接触経験	有 78.3% (36人) 無 17.4% (8人) 無回答 4.3% (2人)	有 100% (54人) 実習時経験者 72.2% (39人) 実習時外経験者 27.8% (15人)
育児中の気持ち	とても楽しい 65.2% (30人) どちらかというと楽しい 26.1% (12人) 楽しくない 2.2% (1人) 心配 2.2% (1人) 無回答 2.2% (1人)	
児の寝る場所	同室 84.8% (39人) 異室 4.3% (2人) 無回答 15.2% (7人)	



泣き方の特徴についての表現としては“激しい”と表現している人が55.2% (16人), “甘えるように”と表現している人が13.8% (4人)であった(表3①).

2. おむつが濡れたときの泣き方

28.0% (12人) の人が、授乳の前に必ずおむつを見て汚れていると交換してから授乳するという対応を入院中に教えられ、それを家庭においても実行しているということだった。また、21.0% (9人) の人は別の表現で“時間”と回答していたが、同じく授乳する前おむつを見るという意味でそのように回答しているようだった(図1②)。すなわち、これには判別できないと言う結果ととれた。

また判別できたのは、平均すると41.2±46.2日目であった(表2, 図2②)。

泣き方の特徴についての表現としては“おむつが濡れてもほとんど泣かない”が30.8% (8人),

“弱い泣き方”と表現した人が15.4% (4人), “気持ち悪い”と表現した人が11.5% (3人), であった(表3②)。

3. 眠いときの泣き方

40.0% (16人) の人が“目をこする”, “周りのリネンなどに顔をこすり付ける”等のしぐさで判別していると答え、また“しぐさと眠る時刻が近づいていたから”と答えている人が17.2% (7人)であった(図1③)。

しかし、判別ができたのは、平均すると54.9±41.0日目であった(表2, 図2③)。

泣き方の特徴についての表現としては“激しい”と表現している人が30.0% (9人), “ぐずる”と表現している人が26.7% (8人)であった(表3③)。

4. 甘えたいときの泣き方

“声の調子”で判断している人が36.7% (11人)であったが“よくわからないが抱っこすると泣き

表2 母親の「泣き方の特徴」を表した表現の一覧

①お腹が空いたとき			②おむつが濡れたとき		
泣き方	%	人数	泣き方	%	人数
激しい	55.2	16	泣かない	30.8	8
甘えるよう	13.8	4	弱い	15.4	4
弱い	6.9	2	気持ち悪い	11.5	3
ネコのよう	〃	〃	激しい	3.8	1
泣き止まない	〃	〃	ぐずるような	〃	〃
弱い	3.8	1	ずっと同じ調子で泣き続ける	〃	〃
悲しそう	〃	〃	怒っているような	〃	〃
顔を歪ませじだんだをふむ	〃	〃	泣かずにアッアッと声を出し体をくねらせる	〃	〃
			足をバタバタさせる	〃	〃
			鼻をならす	〃	〃
			とぼけた	〃	〃
			むずむず	〃	〃
			おぎゃー	〃	〃
③眠いとき			④甘えたいとき		
泣き方	%	人数	泣き方	%	人数
激しい	30.0	9	甘えるように	29.3	9
ぐずる	26.7	8	激しい	22.6	7
甘えるように	13.3	4	弱い	16.1	5
弱い	10.0	3	うそ泣き	9.7	3
ふぎふぎや半分寝ながら	3.3	1	泣かない	3.2	1
寝言を言う	〃	〃	怒っている	〃	〃
うつぶせで目がとろとろ	〃	〃	額を見ると泣き止む	〃	〃
じっと目を見て訴える	〃	〃	じっと目を見て声を発する	〃	〃
ネコのよう	〃	〃	ネコのよう	〃	〃
うーうー	〃	〃	呼ぶ	〃	〃
			泣いては止まってるくり返し	〃	〃

止んだから”と答えている人は26.7%（8人）であった（図1④）。

また、判別できたのは、平均すると64.4±37.8日目であった（表2図2④）。

泣き方の特徴についての表現としては、“甘えるように”と表現している人が29.3%（9人），“激しい”と表現している人が22.6%（7人），“弱い”と表現している人が16.1%（5人），“うそ泣き”と表現している人が9.7%（3人）であった（表3④）。

Ⅲ. 学生の調査結果

1. 学生の児との接触経験内容別による正解率の比較

表4、図3より、お腹が空いたときの泣き方については、実習時で児との接触経験をもつ学生の正解率が76.9%と高かった。一方、実習以外の児との接触経験をもつ学生では3割しか正解しておらず、両者に有意差が認められた（ $p < 0.01$ ）。

おむつが濡れたときの泣き方については、両者とも正解率が低かった。

また、眠い時・甘えたいときの泣き方の正解率

は、実習時での児との接触経験をもつ学生よりも実習以外の児との接触経験をもつ学生のほうが46.7%と高く、約半数の人が正解していた。

2. 泣き方の特徴の表現

空腹時の泣き方については“激しい”“不快そう”と捉えていた（表5①）。

不快時の泣き方については“あまり泣かない”“弱い”“眠そう”と捉えていた（表5②）。

眠いときの泣き方については“眠そう”“弱い”“さみしそう”“あまり泣かない”“話をしているよう”と捉えていた（表5③）。

甘えたいときの泣き方については“眠そう”“弱い”“さみしそう”“おむつを換えて欲しそう”と捉えていた（表5④）。

3. 母親と学生の比較

空腹時の泣き方については、実習時に児との接触経験をもつ学生が76.9%と正解率が高く、実習をした学生には容易に判別できることがわかった。しかし、母親が判別できるようになった日数は32.6（平均）日目であった。

また、泣き方の表現を比較すると、空腹時の泣き方に関しては両者とも“激しい”と表現した人が最も多かった。

不快時の泣き方は“あまり泣いていない”と表現した学生が最も多く、泣き方を判断できていない母親と同様に、泣き方の特徴はほとんど把握していなかった。

眠いときの泣き方は、学生においても捉え方は

表4 学生の児との接触内容別による聞き分け比較

①お腹が空いたとき					
回答	正解	不快	眠い	甘え	うれしい
実習時経験者	76.9	20.5	2.6	0.0	0.0%
実習時外経験者	33.3	46.7	0.0	0.0	13.3
** ; P < 0.01					
②おむつが濡れたとき					
回答	正解	空腹	不快	甘え	うれしい
実習時経験者	5.1	5.1	28.2	38.5	15.4%
実習時外経験者	13.3	6.7	26.7	40.0	6.7
③眠いとき					
回答	正解	空腹	不快	甘え	うれしい
実習時経験者	25.6	7.7	2.6	17.9	43.6%
実習時外経験者	46.7	0.0	13.3	6.7	26.7
④甘えたいとき					
回答	正解	空腹	不快	眠い	うれしい
実習時経験者	25.6	17.9	15.4	33.4	5.1%
実習時外経験者	46.7	13.3	26.7	6.7	0.0

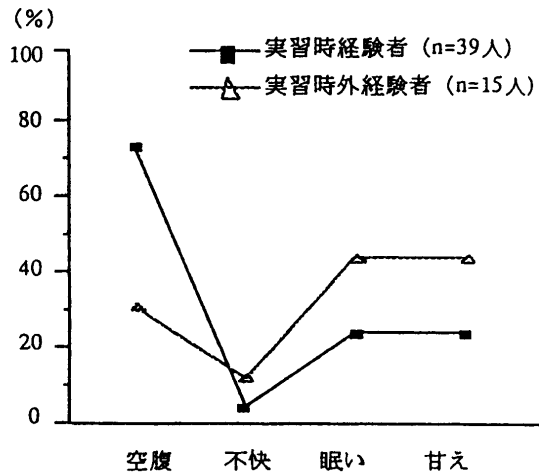


図3 学生の児との接触系毛印内容別泣き声正解率比較

表5 学生の「泣き方の特徴」を表した表現の一覧

①お腹が空いたとき			②おむつが濡れたとき		
感じ方	%	人数	感じ方	%	人数
激しい	68.0	17	あまり泣いていない	40.0	8
不快	12.0	3	弱い	15.0	3
眠そう	4.0	1	眠そう	10.0	2
泣き続けている	"	"	なんとなく	"	"
お腹すいている感じ	"	"	激しい	5.0	1
一番の欲求	"	"	甘えているよう	"	"
必死に聞こえない	"	"	間隔が短い	"	"
			楽しげ	"	"
			特に意味のない泣き	"	"

③眠いとき			④甘えたいとき		
感じ方	%	人数	感じ方	%	人数
眠そう	17.6	5	甘えているよう	16.0	4
弱い	"	"	弱い	"	"
甘えているよう	14.3	4	オムツを換えてほしい	12.0	3
あまり泣いていない	10.7	3	何か訴えているよう	8.0	2
話をしているよう	"	"	眠そう	"	"
なんとなく	7.1	2	激しい	"	"
人の声に反応しているよう	"	"	不快そう	"	"
不快そう	3.6	1	笑っているよう	4.0	1
トーンが低い	"	"	リズムよく泣いている	"	"
声が延びだるそう	"	"	トーンが低い	"	"
強弱がある	"	"	ずっと泣いている	"	"
			ときどき泣き止み眠いときには長すぎる	"	"
			お風呂に入っている	"	"

さまざまであり、「眠そう」「弱い」という表現が多く、「ぐずる」と表現した母親と類似した捉え方であった。

また、甘えたいときの泣き方に関しても、「弱い」「さみしそう」と表現した学生が多く、眠いときの泣き方と同様で、「甘えるように」「弱い」と表現した母親と類似した捉え方であった。

IV. 母親が児の泣き方の意味を理解できる要因について。

アンケートの結果から、育児中の気持ちが「とても楽しい」を2点、「どちらかという楽しい」を1点、「楽しくない」を0点、と点数化し、分析した。

1. 児の泣き方が判別できた日数（平均）と育児中の気持ちとの間には「空腹」時の泣き方については、相関係数-0.650、「不快」時の泣き方については-0.633、「眠い」時の泣き方については-0.665、「甘えたい」時の泣き方については-0.713とすべ

ての泣き方に負の関係性があった。

2. 児の泣き方を判別できた日数（平均）と児が泣いたとき、泣き方を判別しようとする母親の対応数との関係は表6のとおり。「眠い」、「甘え」の判別ができた日数には関係性が高かった。（相関係数-0.519）。

また、「空腹」、「眠い」時の泣き方を判別できた日数と、泣いたときの母親の対応の数の多い人に有意な関係性が認められた（相関係数-0.630）。

表6 泣き方毎の獲得平均日数と判別手段数・母親対応数との関係

	判別手段の数	対応の数
空腹(32.6日)	1.3±0.8	2.0±1.7**
不快(41.2日)	1.4±1.0	1.4±1.5
眠い(54.9日)	1.3±0.8*	1.5±1.3**
甘え(64.4日)	0.8±0.7**	1.3±1.2

\* ; P<0.01, \*\* ; P<0.05

3. 児の泣き方を判別できた日数(平均)と過去の児との接触経験の有無とは、すべての泣き方において有意な関係は認められなかった。

## 考 察

### I. 母親がその泣き方を判別する手段

#### 1. お腹がすいたときの泣き方

児は3時間ごとに空腹になると入院中に教えられ、ずっと3時間ごとに授乳していた母親は空腹時の泣き方を Wasz<sup>1)</sup> のいう現在幼子の世話をし、母親をしていて認知能力を持って同定し、判別しているといえる。また、母親は空腹時の泣き声を出産直後から、毎日、何度も聞かされることにより、他の泣き声より早期に空腹時の泣き方の判別ができるといえる。これは大井が、新生児の泣く原因として最も多いのは空腹と寂しさである<sup>3)</sup> といっていること、さらに Aldrich らが出生後から生後8日までの新生児の泣き声の原因について詳細な観察を行った。それによると、泣き声の原因が明らかであったもののうち、最も多かったのは空腹で1日6.9回、次いでおむつの濡れ(小便)4.1回、おむつの汚れ(大便)1.9回、嘔吐0.1回その他不明が8.2回であった<sup>4)</sup>。 といっていることから裏付けられる。

泣き方の特徴で、小林は空腹の泣きは音声学的分析で「オギャア、オギャア」と短い声をリズム正しく繰り返す<sup>5)</sup> といっている。こうした泣き方の特徴も含め、多くの母親が生理的な欲求として激しさを感じている。

#### 2. おむつが濡れたときの泣き方

おむつを触ったり、時間を基準にして泣き方を判別している傾向にある。これは入院時「おむつ交換-授乳-おむつ交換」の順で教えられ、知識を得ているためと考えられる。よって家庭でも授乳時間が基準となり、授乳の前におむつを見て汚れているとおむつを交換するという行動は入院中に指導を受け、体現化し、判別能力の獲得をしており、指導の効果が上がっていることと推測される。

しかし、一方、おむつが濡れても「紙おむつではほとんど泣かない」という母親の声も多かった。つまり、紙おむつは水分を吸収した後、皮膚との

接触面が乾いているため濡れによる不快を感じず、児は泣かないのであろう。したがって多くの母親はおむつが濡れたとき、泣き方で判断するのではなく、前後の状況を考慮し、授乳時間を判断の基準としておむつ交換をしていると思われる。

泣き方の特徴で、小林は不快時と痛いときの泣き方のリズムは判別しにくい<sup>5)</sup> としており、また織田も泣き声を発している時間と発していない休止時間の変動が大きいことにより、母親は泣き方の特徴をつかめないのではないかと報告している。このことから、不快時に児が泣いたとしても母親は泣き方で判断しにくいと考えられる。

#### 3. 眠いときの泣き方

しぐさを見て児は眠いんだと判断している母親が大部分を占めている。これは“目をこする”などの動作は成人の眠いときの動作と共通するところがあり、また視覚的にわかりやすいからだといえる。疋田の新生児の睡眠時間は18~20時間で、授乳、おむつ交換、入浴以外は眠っていることが多い<sup>7)</sup> ということから、時間からも児の眠いという欲求を知ることができる。また疋田は生後3ヶ月頃より1日24時間のリズムに次第になじんでくる<sup>8)</sup> とも言っていることより、3ヶ月頃には母親は児の生活リズムを把握できてきており、仕草と合わせて、より明確に眠いという欲求を判断することができると考えられる。また、その泣き方の特徴は、“激しい”と“ぐずる、甘えるように、弱い”という相対する2群に分かれた。このことは、児一人一人の泣き方や母親の捉えかたはさまざまであることがわかり、決定的な特徴はないといえ、しぐさが伴い判断していると推測できる。

#### 4. 甘えたいときの泣き方

他の欲求に比べ、泣き方で判断している母親が最も多いことから、何か声に特徴があると推測できる。これは甘えの泣き方に関して大井が音の高低や強さの大小が見られ、また、とぎれとぎれに断続して泣いたりする<sup>3)</sup> といっていることより、泣き声に特徴があるといえる。しかし、その一方で「よく分からない」と答えた母親も26.7%と多く、このような母親は声で判別できないため児が泣いた時に抱っこしてみるという行動につながっていると考えられる。判別できた日数は大井の5、

6ヶ月児では周囲に向かって反応しながら感情や情緒の表現として泣き声を上げるようになる<sup>3)</sup>とする従来の見解よりかなり早期であったといえる。これらのことより、3ヶ月頃ですでに母子間の感情の交流は可能であることが示唆される。

泣き方の特徴では“激しい”と“甘えるように”の相対する2群に分かれていたことで、児一人一人の泣き方や母親の捉え方はさまざまであることがわかり、決定的な特徴はないということが推測できる。また、眠い時と甘える時は泣き方の特徴だけでは区別しにくく、母親がこの2つの泣き声を判別するにはしぐさもあわせて判断しないと、区別が困難ではないかと思われる。

## II. 学生の泣き方の聞き分け

小林の「ME（メディカル・エレクトロニクス＝医用電子）機器による赤ちゃんの泣き声の分析によると、お腹が空いた泣き声の典型的な型は「オギャア、オギャア、オギャア」と短い声をリズム正しく繰り返す<sup>5)</sup>のが特徴である。また、「不快時と痛いときの泣き方のリズムは判別しにくい」ということより、空腹時の泣き方は特徴があるため分かりやすく、正解率が高く、不快時は低いと考えられる。また、実習で新生児との接触経験をもつ学生の正解率が高いことは、実習を行っている病院では3時間おきに授乳時間が設けられており、1日に2回（10時と13時）授乳にかかわることができたことから、記憶に強く残り、すでに学習獲得したものと考えられる。

## III. 母親と学生の泣き方の表現の比較

実習時に児との接触経験を持つ学生は、3日間の実習中に1日2回しか授乳に関わっておらず、また、テープも1度しか聞いていないのに、空腹時の泣き方をほとんどの人が判別できている。つまり育児経験が無くとも、空腹時の泣き方は容易に判別可能であると思われる。しかし、その一方で母親は、早期に判別出来ておらず、母親に対し児の泣き方を判別するための保健指導が必要であると考えられる。

また、毎日児に接している母親と学生の、泣き方に対する表現には大きな違いはなく、両者はそれぞれの泣き方に対して類似した捉え方をしていたことから、過去の育児の経験の有無は判別獲得

を左右するというより Wasz のいう現在幼子と接触し、その状況下に置かれている人がそのニードを満たそうとする意識の高低がキーワードのように思われる。

つまり、学生は短期間の実習の中で、児の泣き方に耳を傾け、その意味を理解しようとして接している。それに対して、母親は産褥早期から母子異室によって児の泣き声を聞く機会が乏しく、入院中、授乳時間だけを気にしすぎていると思われる。その結果、家庭においても児の泣き方を、声の調子からではなく時間で判別する傾向にあり、泣き方の同定にも時間を要するのであろう。

しかし、より早期に泣き方を判別し、児のメッセージを理解するためには、児の声に耳を傾け接していかなければならない。

つまり、今後の課題として、産褥早期からの母子同室により、母親が早期に児との接触を図ることが出来るよう、看護サイドでの指導が必要になると考えられる。

## IV. 児の泣きの意味を理解するための要因

育児中の気持ちで「うれしい」「楽しい」と児への愛着が強いことで、児に積極的に手をかけよう、関わろうとする気持ちが生じることから、そのような気持ちが強いほど、空腹時・不快時・眠い時・甘えたいときの児の泣き方を聞き分けられる日数は早くなる。

また、母性意識は、妊娠、分娩、産褥を通して強まると一般に言われているが、今回の調査から、妊娠中の気持ち、出産時の気持ちがポジティブなことが、泣き声を聞き分け、積極的に関わろうとする行動につながっているとはいえない。しかし、育児中の気持ちがポジティブな母親は、泣き方の意味を判別できる。

判別手段の数や対応の数が多いことは児に対して関心が高く、積極的にかかわろうとする母親役割意識が強い。この母親役割意識が強いほど、判別する日数は早くなる。

児を観察し接する機会が多いと児に対する関心が強くなる。また、欲求が何の欲求か分からないために試行錯誤しながら、判別の糸口をつかんでいくのだと考えられる。

このような母親の対応、つまり育児行動に対し



て児が反応し、母子相互作用は高くなっていく。小林は、その結果、子供はお母さんに対するアタッチメント（愛着）が形成され、母親は子供に対する母親らしい感情、母親が自分の子供をかわいいと思ひ、世話してあげたい、子供がいないとさみしいと思うような気持ちになる。すなわち、広い意味で母性を確立することができる<sup>9)</sup>、と言っている。この裏づけからも、母親の児に対する関わりの量の違いは、どれくらい母親としての役割意識が確立されているかという高さに関係すると思われる。

## 結 論

母親が児の泣き方を判別する能力を、いかに獲得していくのか、その判別能力獲得手段と獲得根拠要因について検討した結果、以下のようなことが推測された。

### 1. 判別能力獲得手段として

- 1) おなかが空いたときの泣き方は、「時間と声の調子」で判断していた。
- 2) おむつが濡れたときの泣き方は、「授乳時間を目安にして、おむつを触ること」で判断していた。
- 3) 眠いときの泣き方はしぐさのほか「声の調子」で判断していた。
- 4) 甘えたいときの泣き方は、「声の調子」で判断している母親と「よく分からない」母親の2群に分かれた。

### 2. 獲得根拠要因として

「うれしい」「楽しい」など「育児中の気持ちの安定、「時間」「しぐさ」「声の調子」などの判別

能力獲得手段の多さ、また、「おっぱいを与える」「おむつを交換する」「抱っこする」「声かけをする」などの対応の多さで早期に判断することができ、これらを臨床の看護援助に活用し、役割獲得の援助法に具体化した指導が望まれる。

## 引用文献

- 1) Wasz-Hockert O.,Partenen T.,Vuorenkoski V.,Valenne E.and Michelsson K:Effect of training on abiling to identify preverbal vocalizations.Med.Child Neurol 6, 397-402, 1964
- 2) 脇田満里子他：新生児の泣き声の意味の理解 母子相互作用の観点から. 助産婦雑誌 48(2) : 66-71, 1994.
- 3) 馬場一雄, 大井照：改定小児生理学 2-3. へるす出版, 東京,1945.
- 4) Aldrich C.A.,Sung G. Knop C.:The crying of newly born babies.J.Pediatr 27 : 89-89, 1945.
- 5) 小林健二：赤ちゃんは泣き声で何を訴えている？-ME分析で分かった乳児の“泣き分け”. 月刊ナーシング 6 (7) 98-100, 1986.
- 6) 織田利光：正常新生児の泣き声に関する研究. 日医大誌55 (1) : 29-37, 1987.
- 7) 馬場一雄, 疋田博之：改定小児生理学, 101-102, へるす出版, 東京, 1994
- 8) 馬場一雄, 疋田博之：改定小児生理学. 97-97, へるす出版, 東京, 1994.
- 9) 小林登：小児看護. 22-22, 文光堂, 東京, 1994.

## Factors involved in the acquisition of the ability to discriminate infant cry types by mothers

Mitsue HORII<sup>1)</sup>, Kyoko SASANO<sup>1)</sup>, Saori IKADAI<sup>2)</sup>, Nino ISHII<sup>3)</sup>,  
and Tomomi HASEGAWA<sup>1)</sup>

1) Toyama Medical and Pharmaceutical University

2) The Japanese Red Cross Medical Center

3) Kanazawa Universities Teaching Hospital

### Abstract

The purpose of this study was to clarify factors involved in the acquisition of the ability to discriminate infant cry types by mothers so that mothers understand the needs and complaints of their infants based on the way and sound of crying, and provide appropriate care without developing anxiety.

A questionnaire survey was carried out in mothers who care for infants to ask the method of discriminating cry types in their infants when they are hungry, uncomfortable, sleepy, or want to be held, and also the basis of the discrimination. For comparison, infant cry types were discriminated using tapes of infant cries by student volunteers in the 4th year of our school who have no experience of infant care but are in the same generation as that of the mothers and may provide nursing support in the near future.

The mothers most frequently discriminate infant cry types based on “time”, followed by “time and the tone of sound”. A few mothers discriminated them based on “gesture”.

Concerning factors involved in the acquisition of discrimination ability, in addition to “stable feeling during child care”, “time”, “gesture” and “tone of sound”, early discrimination among cry types was obtainable in mothers who readily take coping measures for crying such as “breast feeding”, “change diapers”, “holding”, and “talking to” while observing infant responses, in an effort to understand the meaning of the cry.

### Key words

infant care, crying sound of infants, environment for the acquisition of cry type discrimination, skills for the acquisition of cry type discrimination